

# 奈良・平安時代の仏教関係遺物とその意味

——土器・陶製遺物・石製品を中心として——

門 田 誠 一

## 序 言

古代仏教の研究は、文献史料と考古資料とを対象として行われてきたが、それら両種の史資料にはそれぞれに資料性の限界があることも、また自明であつて、前提なく、これらを結びつけることは恣意性につながりかねない。そのため本論では、まず、主として一九九〇年代以降に集積をみた奈良・平安時代に属する仏教関係遺物のなかで、仏像や仏教関係建築物、さらには仏典などとの比較検討により一定の史的考察が可能な資料を抽出し、それらに込められた仏教的要素の特質とその背景や意味を論じることがを企図する。このような目的のために地域的限定はとくに設けなかったが、近来、とみに古代の仏教関係遺物・遺構が質量ともに蓄積していることから、期せずして東国が中心となつた。あわせて、このような東国古代の仏教関係遺物は集落遺跡とその近辺から出土する場合が多いことも一つの特色であり、これと関連して集落内および隣接地からの仏教関係建物址の検出もあいついでいる。論者によつては「村落内寺院」と呼ばれる遺構であつて、これらの資料によつて、東国ではとく

に集落における仏教信仰の存在に言及する研究として一定の結実をみている。

しかしながら、そのような集落次元での仏教信仰の実態や信仰の実修については、未だ考究の俎上に上ることは少ない。そこで本論では東国を主体とした古代集落とその周辺で出土する仏教関係の語句が記されたり、あるいは図像が表されている遺物と仏典や仏教行事などとの比較、対照検討により、古代集落における仏教信仰の実態および具体相について、その一端を明らかにすることを目的とする。

## 一 遺跡出土の仏教的遺物の種類と既往の研究

奈良時代から平安時代にかけて、集落遺跡を中心として出土する宗教関係遺物には、大別すると墨書土器や線刻紡錘車などの文字資料と器物に描かれた図像資料とがある。もちろんこれらが複合した遺物もあつて、その場合はそのに表された信仰をより具体的に示している。

このような宗教関係の遺物のなかでも、とくに墨書土器については、近年、平川南氏、高嶋英之氏による詳細な研究が行われている。平川南氏は同一の文字が出土することによる集落内の祭祀などの存在を指摘し、あるいは仏教信仰と神祇信仰さらには中国起源の冥界信仰が混交した東国古代の集落内における信仰の実態を論じるなど、土器に記された墨書の分析から、古代の信仰の具体相を体系的に示した<sup>(1)</sup>。また、高嶋英之氏は関東地域出土の墨書土器や線刻紡錘車等を中心として、地域における仏教信仰などの実相に迫った<sup>(2)</sup>。

墨書土器のみならず、紡錘車などの石製品に文字や絵画が線刻された資料はとくに関東地域で出土例が多く、とくに文字を線刻された例については墨書土器とともに古代文字資料として集成が行われつつある<sup>(3)</sup>。そのうち、

石刻文字が単独の語ではなく、文章を構成する例に関しては、釈読が行われつつある。鈴木孝之・若松良一の両氏による専論がその嚆矢であり、東国における古代信仰研究を前進させた<sup>(4)</sup>。また、それらを展示図録として集成し、公刊することによって広く知らしめ、研究と啓蒙の俎上にのせようという試みも行われている。

## 二 遺跡出土の仏像・寺院・仏教行事に関連する遺物

奈良・平安時代には瓦や須恵器、土師器などに線刻や墨書で仏像や寺院建築を表現したり、仏教語を線刻した遺物が出土することがあり、それぞれの遺物の属性によって、それらが表現され、あるいは線刻された背景が異なることから、古代仏教の流布と関係する資料として貴重である。以下ではその主な例を瞥見する。

### (1) 仏像の表現

① 仏面刻画丸瓦(四天王寺址・大阪市・七世紀、図1)<sup>(5)</sup>

一九六七年に刊行された報告書では「仏面戯画丸瓦」として記述されている資料で、藤澤一夫氏による報告書中の瓦の時期区分では第三期とされている丸瓦の突面に焼成前に線刻で仏像の面相が描かれている。とくに首の部分には三筋のしわが表現されており、これは「三道」といわれる仏像の特徴であるとされる。

三道とは仏相のひとつで、「仏相の三十二相」には含まれていないが、代表的な仏相のひとつとされており、如来、菩薩、明王などに見られる。通常は三段の帯状の膨らみとして表現されるが、例外も多く、線のないものや、二段や四段になっている仏像の例も多くあるとされる。

② 観音菩薩像線刻平瓦(高麗寺址・京都府山城町・八世紀、図2)<sup>(6)</sup>

高麗寺跡の金堂跡基壇北東隅より出土した厚さ約二センチの薄手の平瓦の凹面に仏像の頭部が線刻されていた。この仏像頭部には宝冠・宝冠台・白毫・眉・眼・眼窩・地発などの表現がみられる。このような特徴から報告書では、この線刻が観音菩薩の表現を熟知した人物によってなされたことが推定されている。

このような仏像あるいは僧形線刻平瓦を線刻した瓦には、ここにあげた他四天王寺、高麗寺から出土した仏像を線刻した平瓦の他にも、同様の資料が知られており、一括して以下にあげておく。

高井田廃寺(大阪府柏原市)

法隆寺(奈良県斑鳩町)

小栗栖瓦窯(京都市)

また、平瓦に僧の姿をした人物を線刻した遺物は以下のような例がある。

四天王寺(大阪市)

吉田寺(広島県府中市)

このような瓦に施された仏像の線刻は戯画とされる場合が多いが、あらためてその像容をみると、実際の仏像に間近に接している人物しか表現しえない特徴を示す例が存在する。

③ 「仏面」墨書土器(八木山ノ田遺跡・千葉県佐倉市、図3-①)<sup>(7)</sup>

八木山ノ田遺跡は弥生時代中期から奈良時代にかけての集落跡で、高崎川南岸の台地上に位置する。一九九四年に行われた発掘調査では奈良時代の竪穴状遺構から仏面墨書土器が出土した。この土器は、土師器の甕の胴部に墨によって仏の顔が描かれたもので、竪穴状遺構の北西角に、その他の土師器や須恵器とともに置かれていた。

一般的な人面墨書土器に対して、仏の顔を描いた例としては初例とされる。

④ 仏教的人物像墨書土器(箱根田遺跡・静岡県三島市・奈良・平安時代、図3—②)<sup>(8)</sup>

箱根田遺跡は奈良・平安時代の遺跡で、三島市南部に広がる田方平野の標高一メートルの安久地区に位置する。

箱根田遺跡ではこれまでの発掘調査によつて、流路が検出され、川辺では自分の身に付いた罪やケガレを人面墨書土器や人形木製品に移し、川に流し去ることで禍が起ることを防ぐ「祓い」の祭祀を行なっていたことが判明した。また、この河川は下流では大場川から狩野川、さらに駿河湾につながることから、この遺跡は物資の集積を行なう水運の拠点だったと推定され、古代における交通や流通の結節点における水辺祭祀の様子が明らかになった。箱根田遺跡からは通有の人面墨書土器とは異なり、僧かと思われる人物の顔を墨書した土器が出土した。このような祭祀に関連するとみられる馬の上下顎骨も出土しており、箱根田遺跡における多様な祭祀の実修を示すこととなった。

⑤ 仏像線刻紡錘車(下宿遺跡・埼玉県北本市、図4)<sup>(9)</sup>

下宿遺跡は古墳時代から奈良・平安時代と中・近世の集落跡で、第二次発掘調査で、平安時代初期の第三号住居跡から仏像と文字の線刻のある石製紡錘車が出土した。

この線刻紡錘車は、北側にカマドをもつ竪穴式住居跡(第三号住居址)で、壁の内側にめぐらされた溝の中から出土した。紡錘車は蛇紋岩製で、最大径四・五センチ、狭径三・一センチ、厚さ一・五センチである。片側の表面には額に白毫を表現した仏像と「牛甘」という文字が刻まれていた。住居跡から出土した土器等の年代から、平安時代初期のものと推定されている。

⑥小杉丸山遺跡出土仏像線刻須恵器(富山県小杉町、図5)<sup>(10)</sup>

小杉丸山遺跡は射水丘陵の南西部に位置する飛鳥時代後期(七世紀後半)の瓦や須恵器などの製作遺跡であり、窯・工房・粘土採掘坑・工人の住居など、当時の窯業生産の全貌を示す遺跡として知られる。出土した軒丸瓦は飛鳥時代に属し、近畿地方の坂田寺式の系統をひくとされる。近畿地方の瓦の影響と仏教の展開によって成立した北陸での瓦葺き建物造営の始まりと、その歴史的背景を具体的に示す貴重な遺跡として、国指定史跡に指定されている。

出土遺物のなかで、仏像の表現がみられるのは「印仏」として報告されている資料である。これは長さ六・四センチ、幅四・五センチ、厚さ二・五センチの粘土板に仏像の姿が印刻された後、素焼きで焼成されたもので、裏目にはつまみ状の突起がつく。印刻された仏像は通肩で、両手の先を腹前で衣に包み、光背は二重の円光背をなし、台座は蓮華座状を呈する。この仏像について、報告書では如来様の仏像であるとか、衲衣で印相を覆っているのか、印相に見えるのは裾の結び目であるなどの見解が示されているが、像容については確定をみない。しかしながら、鈕が付き、印刻であることから、スタンプとして用いられたことは事実であり、印仏として焼造された遺物と考えられる。

この遺跡からは他に須恵質の仏像台座、「小椅寺」の墨書のある須恵器坏が出土しており、近傍に仏教関係施設が存在した可能性が高いが、「小椅寺」という寺院そのものが存在した史料的な確証はえられていない。

(2) 仏教的建築物・文様の表現

奈良・平安時代遺跡出土の仏教関係遺物には寺院建築仏教的文様を表現した例があり、同時代人の仏教に対す

る認識が知られる資料となっている。以下では、そのような資料の代表的な類例をあげて紹介する。

①戸神諏訪Ⅱ遺跡出土寺院建物線刻紡錘車(群馬県沼田市、図6)<sup>(11)</sup>

紡錘車は糸を紡ぐ道具であるが、まれに文字などが書かれていることがある。戸神諏訪遺跡の仏堂とみられる建物跡の隣接地から出土した直径四・九センチの紡錘車には、寺院の金堂のように見える建物が線刻されていて、その棟には鴟尾が描かれている。全国でも寺院跡の発掘例は多いがこれらに対する同時代における具体的な表現のわかる出土資料は少ない。

ここからは、「宮田寺」と書かれた墨書土器が多数出土していて、この寺の名を記したものではないかと考えられている。

②「佛」墨書および蓮華文墨書土器(南西ヶ作遺跡・千葉県印西市、図7)<sup>(12)</sup>

南西ヶ作遺跡は奈良・平安時代の集落を主体とする遺跡で、一九棟の竪穴住居址が検出されている。そのなかの一基(〇三六竪穴建物址)から出土した土師器坏の側面には「佛」字の墨書が記され、内底面には九弁の素弁蓮華文が墨書されていた。

「佛」字およびこれを含む語が墨書された土器そのものは、全国的にも相当数の出土例があり、本例の報告文では千葉県域でも五五例があることを指摘している。その中でも、「佛」字とともに仏教的意匠として代表的な文様の一つである蓮華文が墨書されている土器が南西ヶ作遺跡で出土したことは注目される。

なお、本例の報告者は、このような「佛」字墨書土器の出土状態としては、伏せたり、あるいは伏せた上で重ねられたりすることがあることから、穢れや罪を封じ込める呪力をもった文言として墨書されたと推定している。

③木製多層塔ヘラ描き瓦(多賀城廃寺・宮城県多賀城市、図8)<sup>(13)</sup>

一九七〇年に刊行された報告書に記載されている遺物で、平瓦の凹面にヘラ描きで表現されている。平面的には塔基壇の南側の位置から、層位としては表土直下から出土した。

瓦そのものは桶巻造りの技法によって製作されており、凸面は無文で、凹面には布目が残っており、これらの特徴によって、多賀城廃寺の創建期に属すと見られている。

ヘラ描きされた図像は明らかに多層から構成された木塔を表現するが、上下が欠失しており、中間の二層だけを残すだけであった。ただし、上方には線の一部が残存しており、下方の割れ目もヘラ描きの痕跡があることから、現在残存する二層の他に、上下にさらに二層が描かれていたことがわかり、元来は四重塔がヘラ描きされていたと推定されている。

ただし、木塔として、四重は考えられないので、とくに層塔としての具体性を意識せずに刻されたと考えられる。この瓦は多賀城廃寺の北方三十数キロにある日の出山瓦窯(宮城県加美郡色麻村)または木戸瓦窯(宮城県遠田郡田尻町)において焼造されたとされ、そこで製作にあたった工人が、多賀城廃寺創建以前にすでに五重塔を認識していたことの証左とされている。<sup>(14)</sup>

④陶製三重小塔(新田東遺跡・宮城県石巻市、図9)<sup>(15)</sup>

新田東遺跡は宮城県北部の沿岸部統治のために置かれた桃生城の東側に隣接している。ここでは桃生城と同時期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が多数検出され、その中には火災による焼失住居址もみられた。史料上では桃生城は七七四年に蝦夷の攻撃によって焼失しているので、その際に焼失した可能性が考えられている。新田東遺跡は桃生城に近接した集落遺跡であることに大きな意義がある。陶製三重小塔は、高さ一八・三センチ、底径七・八センチで、この遺跡で検出された一基の竪穴住居址(SI二四)の埋土より、横倒しになり、さらに仏鉢形須恵



器が被さった状態で出土した。これらの出土状態より、なんらかの仏教的儀礼が行われたと考えられている。陶製三重小塔の所属時期については、百万塔を模倣していることより、上限は百万塔が製作された天平宝字八年（七六四）九月以降であり、下限は桃生城が廃絶された宝龜五年（七七四）七月以前と考えられている。

（3） 仏教語陰刻・線刻遺物

奈良・平安時代の遺跡から出土する仏教関係遺物のなかでも、紡錘車や須恵器、瓦などに仏教語が刻された例が知られており、それらを通して、当該期の仏典の流布やその理解などについて、重要な資料を提供するにいたっている。以下にそのような仏教語の記された遺物の主要例をあげる。

① 線刻紡錘車

a 「申如林」 銘線刻紡錘車（ムコアラク遺跡・千葉市、図10）

この遺跡は大規模な宅地開発に伴い、千葉市東南部ニュータウン遺跡として調査された。遺跡は茂呂谷津といわれる地形の最奥にある台地上に所在する。ここで検出された一棟の住居址（DW三三）から、線刻文字のある紡錘車が出土した。この住居址の時期について、報告書では国分期とされたが、<sup>(16)</sup>その後の資料や論考では九世紀前半頃とされており、本論でもこれに従いたい。

線刻紡錘車そのものは上部からの投影形が円形で、断面台形を呈する通有の石製紡錘車であり、関東地方のみならず、北海道および沖縄諸島を除く日本各地の奈良・平安時代の遺跡から出土する通有の形状の石製紡錘車である。

その上面に線刻された文字は紡錘形の線刻文様を挟んで、逆時計回りに「神申如林」という文と、同じく文様

から時計回りに「為南無界秋」という文があった。双方の文の末尾文字である「秋」と「林」とは一部重複しているが、文字間隔からみて、この釈読で大過ないと考える。したがって、線刻文の釈読としては、記号または文様と推定される一文字分をはさんで「神申如林」「為南無界秋」という二つの文章からなる。<sup>(17)</sup>

そのうち、「神申如林」に含まれる「神如林」について、筆者は仏典のなかで釈迦と弟子たちが修行を行った学林樹木である「神恕林」の略記ないしは音通文字による表現であることを明らかにした。<sup>(18)</sup>

②「観下」銘線刻紡錘車(皂樹原遺跡・埼玉県神川町、図11)

皂樹原遺跡は神流川右岸の扇状地中央の標高八五メートル付近に位置する。一九八〇年に最初の発掘調査が行なわれ、その後、一九八七年以降に行われた発掘調査の報告書が相次いで刊行されており、それらでは皂樹原・檜下遺跡として、一体的に扱われている。<sup>(19)</sup><sup>(20)</sup>

本論で取り扱う石製紡錘車は、一九九二年に刊行された『皂樹原・檜下遺跡Ⅳ(奈良・平安時代編3)』の「調査成果のまとめ」中の「奈良・平安時代の遺物(4) 文字資料の集成」のうち、「刻書紡錘車」六点中の一点として、図が掲載されているが、釈字・釈読については、正確な解説を経ていないとして、記述がなされていない。<sup>(21)</sup>

その後、この刻書に対して、「観下十大身部力見宜全尔」という釈字がなされ、その意味として「糸をうまく紡ぐための呪文」という解釈が示された。<sup>(22)</sup>

これに対し、筆者は線刻文の詳細な観察を通して、「観下十大身部力 毘宜□□」という釈字を行った。そして、この文章のなかには「観下」という物理的あるいは観念的に下部方向への観想を示す語が存在し、かつ「十大身部力」は『大般涅槃經』巻第十「現病品」などに現れる「十大牛力」「十青牛力」「十凡象力」「十野象力」などの語句を背景としていることを示し、これはいわゆる釈迦の十力に通ずることを論じた。<sup>(23)</sup> すなわち、この線刻文

は特定の仏典を背景とした仏教語によって構成されており、東国古代の集落には、このような仏典およびそれに対する一定の知識が流布していたことを明らかにした。

②「大佛」 銘刻印須恵器(鳥海山遺跡・青森県平賀町、図12)<sup>(24)</sup>

鳥海山遺跡は東北縦貫自動車道建設に伴って一九七五年に調査された。遺構としては奈良・平安時代の住居址・竪穴遺構・溝状遺構・鍛冶遺構などが検出された。そのなかで、一号住居址からは埋土から多数の須恵器・土師器が出土した。北側と西側の壁面近くには本来は壁材であつたと考えられる炭化材がみられ、炭化材と床面の間より、「大佛」のヘラ描き文字のある須恵器を転用した硯が出土した。この住居址と出土遺物の所属時期は平安時代頃とされている。

近隣の細越遺跡では「寺」の文字が墨書された須恵器が出土しており、鳥海山遺跡出土の「大佛」銘須恵器とともに、仏教の伝播を示すものと位置づけられている。<sup>(25)</sup>

③「大千世界」 銘人物線刻平瓦(西山廃寺・京都府八幡市・八世紀、図13)<sup>(26)</sup>

西山廃寺は男山丘陵上に所在し、一九七〇年に発掘調査が行われ、塔心礎が検出されている。出土した瓦には飛鳥時代にさかのぼる高句麗系の瓦があり、創建時の瓦と推定されている。その他には奈良時代後半から平安時代の瓦が出土している。なお、西山廃寺は和気清麻呂ゆかりの足立寺の比定地とされている。

ここから出土した奈良時代に属す平瓦の一点には凸面に人面または仏面の線刻があり、その傍らには唇の線刻と「大千世界」の文字が刻されていた。この「大千世界」の語は仏教語であり、基本的には三千大千世界として用いられる。この語は古代インド人の世界観による全宇宙を表す言葉であつて、略して「三千世界」「三千界」「三界」とも呼ばれる。

この語が示す世界観では須弥山を中心にしてその周囲に四大洲があり、そのまわりに九山八海があるとする。その一つが人間の住む須弥世界で、上は三界の一つである色界の初禪天から、下は大地の下の方輪にまで及ぶ範圍をさす。この一つの世界が千個集ったのが小千世界で、さらにこの小千世界が一千に及び集った世界が中千世界で、中千世界がさらに一千集ったものを大千世界という。この大千世界は大・中・小の三種の千世界から成るので「三千大千世界」という。三つの千世界から成る大千世界である。したがって三千大千世界は千の三乗、十億の須弥世界から成り、これが一人の仏が教化する範圍であるとされる。西山廃寺で出土した平瓦の「大千世界」銘には以上のような意味があり、仏教の世界観を示す語が瓦に線刻されていたことが知られた。

#### (4) 仏教行事に関する遺物

奈良・平安時代の遺跡では油痕の付着した土師器坏などが単体ではなく、複数個体が集中して出土する場合があり、これらは燈火を用いた仏教的な儀式と結びつけて理解されることが多い。以下ではこれをはじめとして、仏教儀礼と関連する遺物あるいは出土状況を示す典型的な例をあげる。

##### ① 「花会」 墨書土器(多賀城廃寺・宮城県多賀城市、図14)<sup>(27)</sup>

すでにふれた多賀城廃寺の発掘調査報告書刊行後の発見された資料である。墨書に記された「花会」は従来より、仏教の儀式の一つとされている。しかしながら、実修された儀式と具体的な内容とその意味については、これまで検討がされていない。

##### ② 仏教行事の燈明に使用された土器群(高崎遺跡・宮城県多賀城市、図15)<sup>(28)</sup>

高崎遺跡は多賀城に付属する多賀城廃寺の南西約五〇〇メートルに所在する。一九七六年の調査によって、わ

ずか一〇平方メートルの対象地で検出した土壌から、合計六四〇点程度の土器が出土した。その内訳は須恵器(須恵器系土器を含む)が六割弱、土師器が四割弱を占めていた。特筆される点は器種が坏類のみで構成されていることであり、さらに個別の土器の内面に燈明の油痕状の付着物が認められたことである。これらの土器は年代としては一〇世紀前半とみられている。<sup>(29)</sup>

その後、一九九四年にも二ヶ所の土器廃棄遺構(SX一〇八〇、SX一〇八一、ただし同一遺構の可能性がある)が検出されている。一九七六年の調査の出土遺物も含めると、これらの遺構からは、合計三次におよぶ総計二三八三個の土器が出土しており、そのほとんどが坏であり、かつ油痕の付着した燈明皿であった。報告書では、このような土器に対し、万灯会のような仏教儀式に用いた土器を廃棄したものと推定した。これらの土器は火山による降灰との関係から、一〇世紀前半後に廃棄されたと考えられている。また、油痕の観察からは、一つの灯明皿に複数の灯心を燈したり、あるいはかなりの量の灯心を点していたことが報告されている。<sup>(30)</sup>

多量廃棄された一連の土器のなかには「観音寺」と墨書された土師器坏(東町裏地区SK一六一出土)があり、多賀城廃寺の寺名を示す可能性が示唆されている。<sup>(31)</sup>

③「千油」墨書土器(寺内廃寺・埼玉県江南町、図16)<sup>(32)</sup>

平成三年から平成四年にかけて調査された寺内廃寺は、調査の結果、八世紀半ばに創建され、一〇世紀後半まで存続したと推定されている。

この古代寺院の正式な名称は伝承されていないが、「花寺」と墨書された土器が出土していることから、この字句を含むか、あるいは関連した寺名であった可能性がある。調査の結果、この寺院跡は北辺五四〇メートル、東辺二〇〇メートル、西辺三〇〇メートルにもおよぶ面積を有していたことが判明した。

金堂と推定される基壇建物跡は、伽藍のほぼ中央に位置し、確認された礎石配置から、「三間四面庇付建物」で、幅五間一二メートル、奥行四間九・八メートルの建物と推定されている。この基壇上からは、土師器・須恵器・瓦・塑像仏破片・鉄釘などが出土した。

寺内廃寺からは、燈明皿に使われた坏・碗・皿などが出土した。そのなかには「千油」の墨書が記された土器が確認されている。この墨書は「千」は油の量を意味するのではなく、千燈会・万燈会などの法会に際し、参道や伽藍の周りで用いられた可能性も想定すべきであろう。

④「千手懺悔過」木簡(荒田目条里遺跡・福島県いわき市)<sup>(33)</sup>

荒田目条里遺跡は主として流路から平安時代の木簡が多数出土し、そのなかにはいわゆる郡符木簡が出土したことで知られる。そのほかにも仏教関係の儀式である懺悔に関する木簡も出土している。それは一〇号木簡であり、以下のような墨書がなされていた。

a 面

□□二□ 千手一□

陀<sup>羅</sup>尼甘遍 浄土阿弥

大仏頂四返 千手懺悔過

b 面

貞□ 俗名丈部裳吉

□ 経

□

表裏の区別があつたかどうか不明なため、仮にa、b面としたが、a面には「陀羅尼甘遍」、「大仏頂四返」と

いう文がみられる。これはおそらく陀羅尼を二十回読誦し、大仏頂経などの経を四回読経したことを示すと考えられる。「千手懺悔過」は正しくは「千手懺悔過」のことであり、千手観音を本尊として己が罪を懺悔し、罪報を逃れることを求めるための悔過のことと考えられる。

これらの木簡の意味するところとしては陀羅尼や經典の読誦回数が記されている点で、優婆塞の貢進に関する記載ではなく、沙弥などの修行に関わる記録である可能性が推定されている。<sup>(34)</sup> 郡符木簡の存在とも勘案すると、郡衙の周辺で沙弥や優婆塞などによって、悔過が行われていたことが推定される。

(参考)「金光明王最勝王経」転読木簡(江平遺跡・福島県玉川村、図17)<sup>(35)</sup>

江平遺跡は縄文時代晩期から奈良・平安、中世にいたる時期の遺構が発見された複合遺跡であるが、ここで出土した奈良時代の木簡は天平十五年正月の聖武天皇詔に関する資料として注目された。

この木簡には、「最勝□□佛説大□功德四天王経千卷又大□□百卷」「合千卷百卷謹皆万呂精誦奉天平十五年三月□日」と判読される墨書があり、七四三(天平十五年)年一月十四日から四十九日間にわたって、全国の僧に「金光明王最勝王経」を読ませたことが「続日本紀」に記載されており、この記載内容と木簡の記述が一致ことで注目された。

### 三 出土遺跡・遺構と仏教関係遺物の個別的意味

ここまで挙例してきた仏教関係の語句や図像・図文のみられる遺物について、当該時期の社会において、それらが示す仏教信仰の様相を、以下に内容ごとに整理しておきたい。

(1) 仏像および仏教施設・建築物の把握と描写

仏像を表現した図が表された遺物については、四天王寺址仏面刻画丸瓦、高麗寺址観音菩薩像線刻平瓦、西山廃寺「大千世界」銘人物線刻平瓦などに端的に示されるように寺院に安置された仏像そのものをもとにして、瓦などに仏像を表現した一群の遺物がある。当然ながらこれらは間近に存在する仏像によって、線刻されたと考えらるがゆえに仏像の諸要素や特徴を活写しているのみならず、西山廃寺「大千世界」銘人物線刻平瓦のように仏教語をもあわせて記してあることに端的に示されるように仏教思想そのものに対する一定の理解を背景としている。すなわち、この種の遺物は仏像と仏典およびそれに対する講学を行う僧などの存在を前提として表現され、かつ表記される図像や字句であることは自明である。

集落遺跡である戸神諏訪Ⅱ遺跡出土寺院建物線刻紡錘車などは寺院とみられる建物があくまでも戯画的に線刻されており、表現した人物が寺院を見聞しながらも、仏教への深い造詣なしに表したものと考えられる。集落遺跡から出土した遺物とは出土遺跡の属性が異なるが、多賀城廃寺で出土した平瓦に線刻されていた塔も、実際には存在しない四重の塔を表している点から、瓦工人の水準の思惟をもとにして、やはり戯画的に線刻されたものであるろう。

これに対して、須恵器生産関係遺跡である小杉丸山遺跡で出土した須恵器に線刻された仏像は、実際に通肩の衣、円光背、蓮華座状台座などの仏像の諸特徴が表現されており、須恵器生産に従事した工人が単なる戯画として表現したとするよりも、実際に仏像を見たうえでの所与の仏教理解があつてこそ可能な仏像表現であり、近傍に寺院の存在が推定される。



このように線刻遺物の表現を行った人々の階層や属性について、具体的に推定できる資料としては、下宿遺跡の仏像線刻紡錘車がある。この紡錘車には額に白毫を表現した仏像と「牛甘」という文字が刻まれており、この図を線刻した人物の名前ないしは職業を指すと考えられる。職業であるとすれば、牛甘はすなわち牛飼いであり、牛馬の飼育を生業とした人物が線刻したことになる。人名であるとしても、僧名ではなく、名前からは、いちおう仏教とは直接の関係を示さない一般民が、このような写実的かつ仏像の特徴をおさえた図像を刻しえたことになる。

## (2) 仏教儀式・儀礼の存在

すでにふれたように高崎遺跡では内面に煤が付着した土器が集中して出土したことから、報告書では「万灯会」に類似した仏教の法会ないし行事が行われた可能性が示唆された。

万灯会に類した仏教行事は、孝徳天皇の白雉二年(六五二)十二月の晦日に味経宮において、二千百人余りの僧尼に一切経を読ませ、夕には二千七百余りの燈火を朝廷の庭内に点じて、安宅経・土側経などを読ませた、<sup>(36)</sup>とあるのが史料上の初見とされる。この際の行事の目的は読経された經典からみて、難波宮の安鎮かとされている。<sup>(37)</sup>

奈良時代には天平十六年(七四四)に「丙申。度一百人此夜於金鍾寺及朱雀路燃燈一万坏」<sup>(38)</sup>の記述があり、天平十八年(七四六)には「天皇、太上天皇、皇后行幸金鍾寺。燃燈供養廬舎那仏、仏前後燈一万五千七百坏」<sup>(39)</sup>などのように、都において、天皇や政府と関連して灯明をあげて実修した仏教儀式の史料がある。そして、先行研究ではこれらを引きながら、地方においても同様の儀式が行われていたことが示唆されている。<sup>(40)</sup>

これ以外に万灯会およびその灯火に関する文献史料および論考は、管見の限りにおいては存外に少ない。その

中では、空海によるとされる高野山における万灯会の記載がある。

すなわち、『続遍照發揮性靈集補闕抄』卷八所収の「高野山万燈会願文」であって、これによると空海は天長九年(八三二)八月二二日に金剛峯寺において、万燈万花会を行っている。これは空海による記述のなかでは、高野山で行われた唯一の法会とされ、願文によると、空海は万燈・万花の会を設けて、金剛界・胎藏界の両部曼荼羅の諸尊および四種の智印(曼荼羅)のすべての仏にささげまつると、述べる。ここにおいて空海は万灯・万花の放つ光を、「智慧の火」および「思慮分別の万花」とたとえ、それらはそれぞれ無明を照らす智慧の象徴としての濫の字と思慮分別の象徴である質多(した)の字であるとする。さらに濫の字は法界に広がり、万病を取り除き、また、質多の字は万花の咲くが如く仏諸尊に眼を開くであろう、という。<sup>(42)</sup>

同じく、平安時代後期から鎌倉時代における高野山奥の院御廟前の献燈については以下のような内容が知られている。

藤原頼通が永承三年(一〇四八)に参詣した際には、灯明十万本を廟堂の石欄の元に献じている。<sup>(43)</sup> また、白河上皇の寛治二年(一〇八八)の高野山御幸に際して、奥の院御廟の北側にある石の上に灯明三十万燈を並べ置いた、とし、それは「土器卅坏」にこれを備えた、とする。<sup>(44)</sup> また、天治元年(一一二四)の鳥羽上皇の初度の御幸の折にも、御廟前の犬防下の石の上に「御燈明三万燈」を「居並べ」たとし、やはり「土器卅坏」にこれを盛った、とされている。<sup>(45)</sup>

これらの記述によって、史料にみられる「万燈」の語が実際には必ずしも一万個の灯火を用意したのではないことが知られる。すなわち、平安時代後半には高野山の空海の廟前で行われた万燈会において、土器卅三十個を用いて点じた燈明を「三十万燈」「三万燈」とみなし、これを用いて万燈会を実修していたのである。これらの

記述によつて、とくに平安時代後期の高野山における万燈会とは実際に万の燈火を用いるのではなく、土器坏三十個に燈火を点じることによつて実修されていたことがわかる。

多賀城に近接した高崎遺跡で出土した廃棄土坑(SX一〇八〇、一〇八二)から出土した内側に煤の付着した多数の土器も、万燈会のような仏教行事に用いられたことが推定されている。<sup>(46)</sup>とくにSX一〇八一とされた廃棄土坑では、土器・須恵器などを合わせて二三八三個体が三次の廃棄行為で出土しており、これを試みに上記のような平安時代の事例を参照して土器三〇個を一単位とする儀礼の存在を想定するならば、他の比較資料が乏しくあくまでも参考にすぎないが、単純計算では三度にわたつて、少なくとも八〇回程度に及んで挙行されていたことになる。

このような灯明を燈して行ふ儀礼ないし行事が、どこで、どのように実修されたかについて、報告書では近隣にこれを執行したと考えられる施設が認められず、加えて発掘調査によつて、多賀城南側には方格地割が認められ、それを構成する道路の交差点から土器埋設遺構が相当数、検出されていることから、道路に伴う土器廃棄土坑である可能性が示唆されている。<sup>(47)</sup>

(3) 地域への都城周辺の情報の伝播

形状が百万塔に類似している点でとりあげた宮城県新田東遺跡から出土した陶製三重小塔は、この資料のみならず、その類例が千葉県や岐阜県でも出土している。

しかしながら、百万塔そのものは平城京外へもたらされたという確たる史料および資料の面での証左はない。一般的には都城以外、とりわけ、蝦夷に対する軍政的な働きかけが進出途上の東北地方に、百万塔の影響を著し

く受けた造形物が将来され、あるいは製作されることには、一定の理由がもとめられよう。

新田東遺跡の場合、桃生城に隣接することから、桃生城の経営に関係して移住してきた柵戸によって、百万塔に類似した土製小塔が、この地にもたらされたことが想定されている。その可能性は高いと思われるが、その場合でも、柵戸として配された人々の具体的な仏教信仰の様態が問題とされる。柵戸そのものは一般集落より徴発された人々と考えられており、彼らのもつ信仰をさぐることは、母体である集落次元で行われていた仏教信仰の実修のありさまを知る端緒となる。その意味では百万塔が柵戸の住居址から出土したことは、そこに住した人々が百万塔そのものを認識していたことを示すのであって、宮都の情報が伝達していたか、あるいはそれが伝わる地域に出自する人士であったことを推測させる。

いうまでもなく柵戸とは地方から徴発され、東北地方の古代城柵設置を目的として配された人々であるが、七世紀後半から八世紀初頭においては、東北地方とりわけ陸奥国への柵戸の移住については史料がほとんどなく、『続日本紀』霊龜元年(七一五)五月二十日の「相模、上総、常陸、上野、武蔵、下野六国の富民千戸を移して、陸奥国に配す」<sup>(48)</sup>という記述が唯一とされている。<sup>(49)</sup>

また、新田遺跡に隣接する桃生城の柵戸および配流人等に関しては、『続日本紀』に以下のような史料がある。

(A)天平宝字元年(七百五十七)四月四日

不孝・不恭・不友・不順等の者を陸奥国桃生、出羽国雄勝に配す。

(B)天平宝字二年(七五八)十月二十五日

陸奥国浮浪人を動因して、桃生城を造らせることにし、調庸を復し、定住させた。

(C)天平宝字四年(七六〇)

薬師寺僧、殺人を犯し、還俗させられ、陸奥国桃生柵戸に配された。

(D) 神護慶雲二年(七六八)十二月十六日

勅して、陸奥国内および他国百姓で、陸奥国の伊治城・桃生城下に住むことを願うものは受入れ、法に依り復を給う。

(C) 神護慶雲三年(七六九)正月三十日

太政官が右の二城下に移住したいものがあれば、どこの国のものでも法外に復を給うことにしたいと奏上し、天皇の裁可を得た。

(D) 神護慶雲三年(七六九)二月十七日

坂東八カ国に勅し、各国の百姓で右の二城城下への移住希望者を募り、それらの者には法外に優復する。

史料(D)にみられる「復」とは「除く」という意味であり、調・庸・雑徭などを免除することとされる<sup>(50)</sup>。

これらと関連する史料として『令義解』に引く軍防令・縁辺諸郡人居条によれば、「東辺、北辺、西辺に縁れる諸郡の人居は、皆、城堡の内に安置せよ。其れ営田の所には唯、庄舎を置け、農事に至りて営作に堪えらば、出でて庄田に就け、収斂し訖りなば、勅して還せ。其れ城堡崩れ頽(おち)たれば、当処の居戸を役して、閑に随つて修理せよ」とあり、本来、北辺の辺郡、すなわち蝦夷と境を接する地帯を含む柵戸などは「城堡」の中に住んで、その外部にある田を営み、そこには「庄舎」を作り、農作業の繁忙期にはそこで働き、終われば帰る、ということが許されていた。ここでいう「城堡」は古代城柵を指すと解されるので、この条文からは柵戸を主とした移配された人々が、原則的には城柵の内部に住み、農作業の繁忙期などには城外に仮住まいすることが許されたという規定があったことが知られる。

このような史料からも、桃生城およびその周辺には柵戸を中心とした他地域からの移住者の存在があったのであり、これらの人々が仏教やそれに関連した文化事象の移入に関与したことが想定される。とりわけ、注意されるのが、(C)としてあげた天平宝字四年(七六〇)に殺人を犯した薬師寺の僧が還俗させられて、桃生城の柵戸として配流された記事である。これによって、当時の都周辺の情報や文化・思想などが、桃生城の周辺地域にもたらされたことが考えられる。百万塔の造顕と時期的にはさかのぼるにしても、新田遺跡から百万塔に類似した陶製三重小塔が出土する背景に、このような都城から移住させられた人々の存在があつてこそ理解されるのであり、都の情報や専門知識や思想を有した人々を通じて、東北地方にその造型が将来された可能性がある。

#### (4) 地域における仏典の流布と理解

本論では仏教語の中でも、出典が程度特定できる語が、墨書ないし線刻されている資料のいくつかについて、個別的な検討を行うことにより、集落次元での仏典の浸透に接近しようとした。

その根拠としては、古代東国で出土した有銘考古資料の中でも、とくに線刻文字のある紡錘車と墨書土器をあげた。とくにムコアラク遺跡出土の紡錘車に線刻された語には、釈迦が弟子たちと教学を行つた学林である「申恕林」を指す「申如林」に代表される仏教語がみられ、その背景として典拠となる経典の存在とそれに対する一定の理解がなければ書写しえないことは明らかである。同様の遺物として、臼樹原遺跡出土の石製紡錘車にも「観下」で始まる線刻文に「十大身部力」のような仏典に依拠する語が記されていた。

このように一般集落においても、仏典に対する相当程度の知識と理解がなければ書写しえない仏教語が、女性が所有するきわめて一般的な生活用具である石製紡錘車に記されていることは、その背景として東国の古代集落

において、そのような仏典の内容を流布させた人々の存在が推定される。それを推測させる事例としては、かつて論じた角田台遺跡から出土した「千仏」墨書鉢形土器がある。すなわち、一般の集落において、このような仏教関係の容器を所持し、それに仏教語たる「千仏」の語を墨書したのは、集落に住む在俗の仏教信者であり、いわゆる優婆塞などの存在を想定してよからう。<sup>(52)</sup>

また、すでに指摘したことがあるように、このような集落次元での仏教信仰および仏教的情報の伝達者を考定する際に考古資料として一定の論拠となりうるのが、距離をおいた複数の遺跡から出土する同一筆跡の墨書土器である。例えば千葉県では同じく東金市に所在するが、互いに三・二キロ離れた久我台遺跡と作畑遺跡で同一筆跡の「弘貫」という僧名と考えられる墨書が記された土器が出土した。<sup>(53)</sup>

奈良・平安時代を中心とした久我台遺跡において、遺構・遺物の面からはほとんど仏教的様相が看取できないことから、僧が定住したとは考えにくく、作畑遺跡を拠点とした「私度僧」の活動と結びつける見解も示されている。<sup>(54)</sup>このような墨書が同筆であり、加えて墨書がなされた土器はそのものも胎土・整形方の細部ともに酷似していると観察されていることから、同一箇所筆写された土器が移動したものと考えられる。<sup>(55)</sup>そして、この墨書の「弘貫」を僧の名とみて大過ないならば、久我台・作畑の両遺跡から出土したこの墨書土器は、集落間における仏教信仰の伝播や浸透についての具体的な荷担者の実態を示しているといえよう。

# (5) 仏教とその他の信仰の混淆

これについても、前項でふれた「申如林」の語を含む線刻文の施されていたムコアラク遺跡(千葉市)出土の紡錘車に、「神」の語があり、これとあわせて仏教語である「南無」の語があわせて記されていることから、す

に指摘されているように神祇信仰と仏教の双方の存在が知られた。

八木山ノ田遺跡では人面墨書土器の人面部分が仏面に替えられた墨書土器が出土しており、人面墨書土器を用い、穢れをはらうことと関係して行われたとされる祭祀に仏教的な要素が重層していることが看取される。同じく箱根田遺跡では人面墨書土器の人面が僧形に描かれている土器があり、これもやはり、人面墨書土器の祭祀に仏教的要素が混じた結果とみられる。これらは通有の人面墨書土器とは異なる意味を想定する必要がある<sup>(56)</sup>。

また、カマドの傍らに「竈神」と墨書された土師器坏などを伏せて置く行為の存在が知られており、古代の東国においてカマド神に対する祭祀とされるが、角田台遺跡では「千仏」の墨書のある鉢形土器が、住居址床面のカマドの近くに同様に伏せた状態で出土しているのは、やはりカマド神信仰に仏教的要素が混淆したものと推定される。

## 結 語

本論ではとくに一九九〇年代以降は中心として、奈良・平安時代の集落遺跡を主体として出土した仏教関係遺物の典型例を抽出し、類型化した後、それらの資料を用いて当該期における仏教信仰の具体相を提示した。

その内容については、個別具体的な論述から構成した本論の特質上、あえてここで繰り返すつもりはないが、本論で考古資料としての属性による類型によつて論じてきた知見を、とくに強調すべき順に内容ごとに要点を摘要しておきたい。

まず、第一には仏典に依拠した仏教語が記された紡錘車などの遺物に、端的に現れているように、古代集落の



次元で仏典の内容が、広くかつ相当に深く流布していたことが知られた。

第二として、そのような仏教語の記された集落出土遺物のなかには、神祇信仰に係する語句とともに、双方が記されていることがあり、一般民の次元で、それらが混在または重層していた具体的な様相の一面を示している。

第三には同様に在来的な祭祀である人面墨書土器の人面部分が僧形に変えられている例があり、これも一般には祓とされる人面墨書土器を用いた祭祀行為に仏教的要素が重層していることを現している。

第四に都城において朝廷に係するような仏教遺物が、遠く離れた地域で出土することである。すなわち、称徳天皇の発願によって造られた百万塔を模した土製小塔が律令国家の北辺である東北部で出土していることについては、『続日本紀』にみえる都城に所在する寺院の僧侶の柵戸としての移配との関係を推定した。

第五として、寺院建築や仏像などが線刻あるいは墨書された遺物については、それらの建築や生産に携わった人々の仏教造形物に対する認識や観察が知られる。

永らく文献史料の検討が中心であり、朝廷や貴族社会を対象としてきた奈良・平安時代の仏教史研究において、以上、縷縷述べてきたように、考古学資料を分析することによって、集落やそこに住む一般民が実修した仏教信仰の具体的な実態の一端を明らかにしえた。このような考古遺物の有する資料性を生かしながら、今後も集落および民衆の次元での古代仏教の具体相に対する闡明を行うべく、諸般の教示を得て、さらなる考究の視野を開きたく思う。

注

(1) 平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年

- (2) 高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版、二〇〇〇年
- (3) 財団法人千葉県文化財センター編「古代仏教遺跡の諸問題―重要遺跡確認調査の成果と課題1―」『千葉県文化財センター研究紀要』一八、一九九七年
- 阪田正一「古代房総の民衆と仏教文化」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会、一九九六年など。
- (4) 鈴木孝之・若松良一「信仰資料としての紡錘車―呪文や宗教絵画を刻んだ石製紡錘車―」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』一六、二〇〇一年
- (5) 文化財保護委員会編『四天王寺』吉川弘文館、一九六七年
- (6) 山城町教育委員会『史跡高麗寺跡』一九八九年
- (7) 佐倉市教育委員会『八木山ノ田遺跡』二〇〇〇年
- (8) 三島市教育委員会『箱根田遺跡発掘調査報告書』二〇〇三年
- (9) 吉見昭「仏像を刻んだ紡錘車―北本市下宿遺跡の調査―」『埋文さいたま』三三、一九九九年
- (10) 富山県埋蔵文化財センター『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第六次緊急発掘調査概要』一九八四年
- (11) 沼田市教育委員会『戸神諏訪Ⅱ遺跡』一九九二年
- (12) 糸川道行「『佛』墨書土器の出土状況―印西市南西ケ作遺跡出土遺物の紹介を兼ねて―」『千葉県文化財センター研究連絡誌』六四、二〇〇三年
- (13) 宮城県教育委員会・多賀城町『多賀城跡調査報告Ⅰ 多賀城廃寺跡』吉川弘文館、一九七〇年
- (14) 伊東信雄「戯画瓦」宮城県教育委員会・多賀城町『多賀城跡調査報告Ⅰ 多賀城廃寺跡』(前掲)
- (15) 宮城県教育委員会『新田東遺跡―三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ―』二〇〇三年
- (16) 財団法人千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン8―ムコアラク遺跡・小金沢古墳群―』一九七九年
- (17) 鈴木孝之・若松良一「信仰資料としての紡錘車―呪文や宗教絵画を刻んだ石製紡錘車―」(前掲)
- (18) 門田誠一「古代集落出土の線刻文字資料に関する一解釈―古代集落における經典読誦の実態―」『佛教大学アジア宗教文化情報研究所紀要』二、二〇〇六年

- (19) 神川村遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡試掘報告』一九八〇年
- (20) 『皂樹原・檜下遺跡発掘調査概報Ⅱ』一九八七年、皂樹原・檜下遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡Ⅰ(中世編)』一九八九年、皂樹原・檜下遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ(奈良・平安時代編Ⅰ)』一九九〇年、皂樹原・檜下遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡Ⅲ(奈良・平安時代編Ⅱ)』一九九一年、皂樹原・檜下遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡Ⅳ(奈良・平安時代編Ⅲ)』一九九二年
- (21) 皂樹原・檜下遺跡調査会『皂樹原・檜下遺跡Ⅳ(奈良・平安時代編Ⅲ)』(前掲)
- (22) 行田市郷土博物館『東歌の郷と古代の文字』二〇〇五年、三二頁
- (23) 門田誠一「古代東国出土紡錘車刻書の仏教的願文―埼玉県皂樹原遺跡出土資料の釈義―」『佛教大学文学部論集』九一、二〇〇七年
- (24) 青森県教育委員会『鳥海山遺跡発掘調査報告書』一九七七年
- (25) 鈴木克彦『日本の古代遺跡Ⅱ九 青森』保育社、一九八六年、二三四―三五頁
- (26) 八幡市教育委員会『西山廃寺(足立寺)発掘調査概報』一九七一年
- 高橋美久二「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査概報(一九六九)』京都府教育委員会、一九六九年
- 八幡市教育委員会編『発掘調査成果展―内里八丁遺跡を中心として―』八幡市教育委員会、一九九三年
- (27) 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史』第四巻考古資料、一九九一年、三六五―三九四頁
- (28) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高崎遺跡―第11次調査報告書―』一九九五年
- (29) 高橋芳弘「高崎遺跡 井戸尻(今村氏)地区の調査」多賀城市史編纂委員会『多賀城市史』第四巻考古資料、一九九一年
- (30) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高崎遺跡―第11次調査報告書―』(前掲)
- (31) 高倉敏明「山王遺跡」多賀城市史編纂委員会『多賀城市史』第四巻考古資料、一九九一年
- (32) 江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会『千代遺跡群・千代遺跡群発掘調査概報』一九九三年

(33) いわき市教育委員会編『木簡が語る古代のいわき―荒田目条里遺跡木簡調査略報―』いわき市教育委員会、一九九六年、二三頁

(34) いわき市教育委員会編『木簡が語る古代のいわき―荒田目条里遺跡木簡調査略報―』(前掲)

(35) 平川南「付編1 福島県玉川村江平遺跡出土の木簡」福島県文化振興事業団『江平遺跡』第三分冊、福島県教育委員会、二〇〇二年

平川南「転読札―福島県玉川村江平遺跡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三年

(36) 『日本書紀』卷二五・孝德天皇・白雉二年冬十二月条

(37) 『日本書紀』下・日本古典文学大系六八、岩波書店、一九六五年、三一七頁の註二六

(38) 『続日本紀』天平十六年(七四四)十二月八日条

(39) 『続日本紀』天平十八年(七四六)十月六日条

(40) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高崎遺跡―第11次調査報告書―』(前掲)、三五―三八頁

(41) 日野西真定「高野山の燈明信仰と僧侶の唱導活動―弘法大師の後身信仰の発生―」『密教体系』八、法蔵館、一九九五年

(42) 宮坂宥勝編著『傍訳弘法大師空海性靈集(中)』四季社、二〇〇一年、四八一―七頁

(43) 『宇治関白御参詣記』続々群書類従第五

(44) 『寛治二年白河上皇高野御幸記』続史料大成第十八卷

(45) 『高野御幸記』続群書類従第三・帝王部

(46) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高崎遺跡―第11次調査報告書―』(前掲)

(47) 多賀城市埋蔵文化財調査センター『高崎遺跡―第11次調査報告書―』(前掲)

(48) 『続日本紀』靈龜元年五月三十日条

(49) 高橋崇『古代東北と柵戸』吉川弘文館、一九九六年、七八―九〇頁

(50) 高橋崇『古代東北と柵戸』(前掲)、五二―三頁

- (51) 『令義解』所引・軍防令・縁辺諸郡人居条
- (52) 門田誠一「東国古代の出土文字資料にみる仏教語―集落における信仰と經典の実相」(前掲)
- (53) 千葉県文化財センター『久我台遺跡・房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』一九八八年  
作畑遺跡調査団『作畑遺跡発掘調査報告書』一九八六年、天野努・栗田則久・田形孝一「出土文字資料と地名」『千葉県市研究』二、一九九四年
- (54) 萩原恭一「久我台遺跡」『千葉県の歴史』資料編3・考古3(奈良・平安時代)(前掲)、千葉県文化財センター『久我台遺跡』(前掲)
- (55) 千葉県文化財センター『久我台遺跡』(前掲)、五四五頁
- (56) 高島英之「仏面・人面墨書土器からみた古代在地社会における信仰形態の一樣相」国士館大学考古学会編『古代の信仰と社会』六一書房、二〇〇六年



図1 四天王寺址・仏面線刻瓦

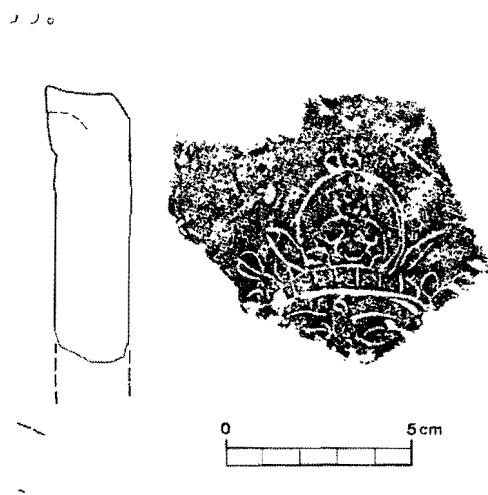


図2 高麗寺址・観音菩薩線刻瓦

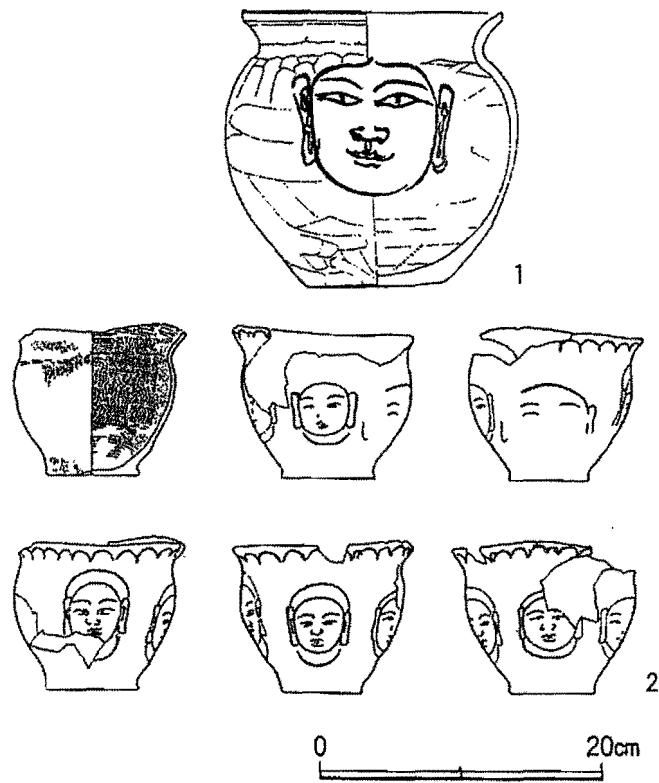


図3 「仏面」墨書土器 ①八木山ノ田遺跡 ②箱根田遺跡

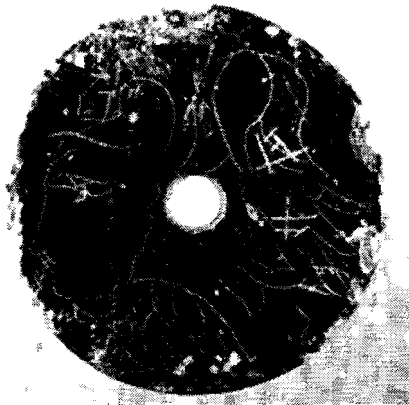


図4 下宿遺跡・仏像線刻紡錘車



図5 小杉丸山遺跡・仏像線刻須恵器

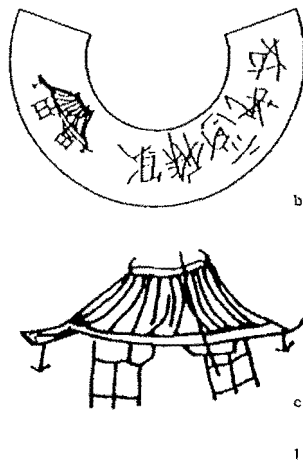


図6 戸神諏訪Ⅱ遺跡・寺院建築線刻紡錘車

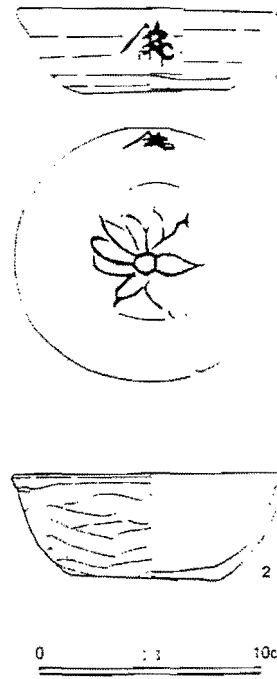


図7 南西ヶ作遺跡・「佛」墨書土器



図8 多賀城廃寺・多層塔線刻瓦

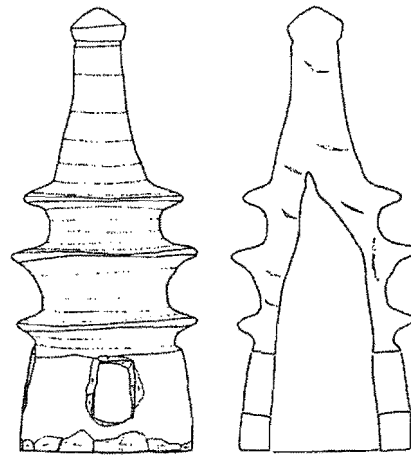


図9 新田東遺跡・陶製三重小塔  
(高さ18.3cm)



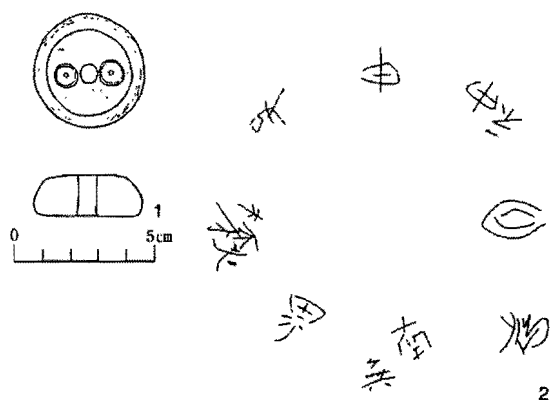


図10 ムコアラク遺跡・線刻紡錘車

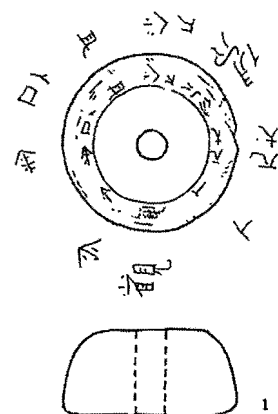


図11 臼樹原遺跡・線刻紡錘車

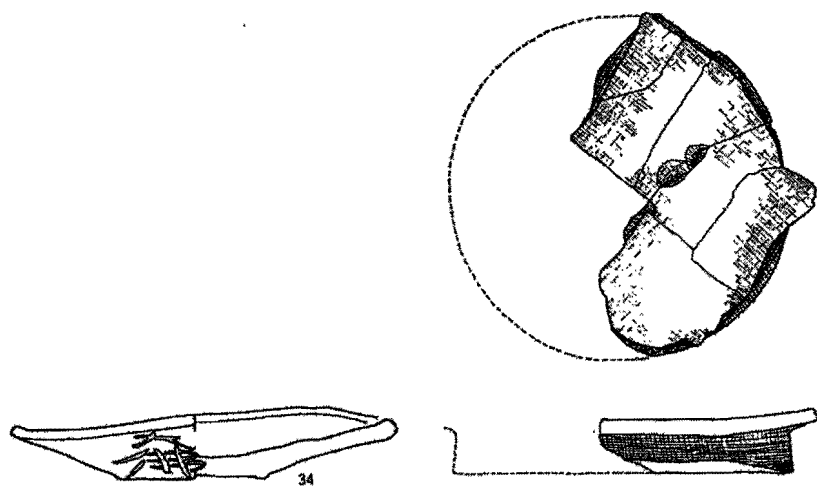


図12 鳥海山遺跡・「大佛」銘線刻須恵器

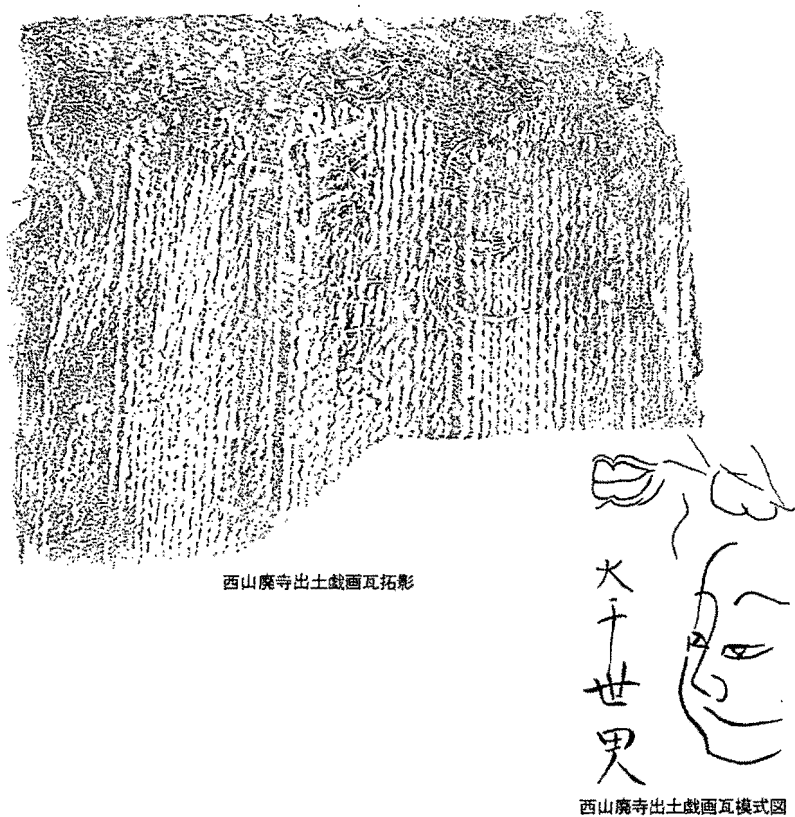


图13 西山廢寺・「大千世界」銘人物線刻瓦

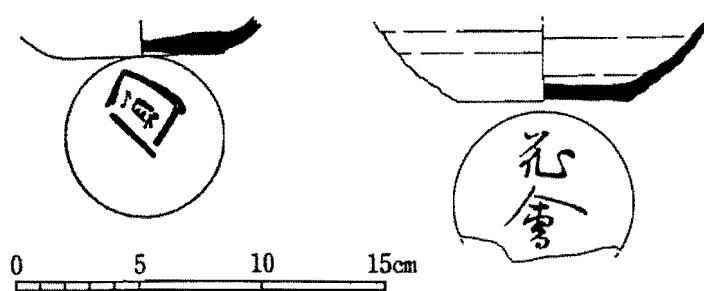


图14 多賀城廢寺・墨書土器

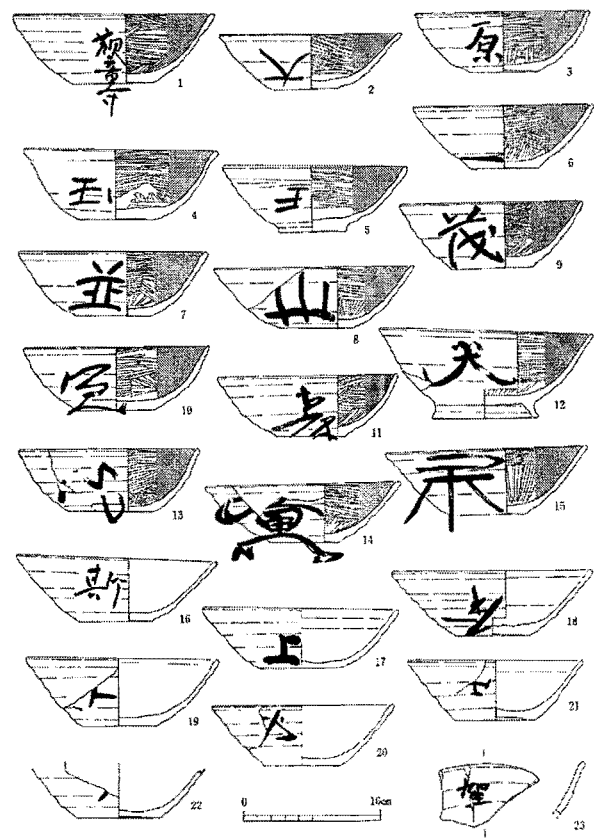


図15 高崎遺跡・墨書土器群



図16 寺内廃寺・「千油」銘墨書土器

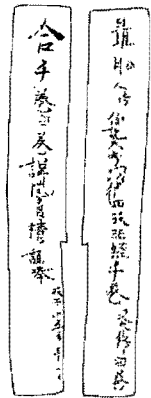


図17 江平遺跡・最勝王經転読木簡

